

主張について、賛成する立場からは「変動期には政権、文化、民族、宗教、経済など過去の歴史に即して現状を分析しなければ、現実にも政治も動かすことはできないのではないか」という論点が提示されるだろう。反対する立場からは「変動期は国内問題だけに起因するのではない。国際政治の力関係や経済力、思想的な潮流などが影響する。これらの要素を総合的に多角的に分析する力こそが必要ではないか」という論点が示されるだろう。

私は反対の立場を基本にして自分の考えを述べたい。トルストイの『戦争と平和』に次のような言葉がある。「すべてを理解することはすべてを許すこと」。確かに、変動期に、その根本の原因となっている歴史的な背景を知ることが大切だろう。政権の思考方法、文化や宗教的な背景、民族間の対立の歴史などに即して考えれば、変動している状況やその変動が向かう先がより見通せるにちがいない。しかし、すべてを理解する（歴史の専門知識を身につける）だけで、現実的な分析が可能になるだろうか。むしろ、専門知識にこだわりすぎてかえって変動期を的確にとらえられないということはないだろうか。筆者のエピソードの中でも「現実に影響を与える知識」を身につけるには「アカデミックな訓練が必要」と述べられている。問題は「アカデミックな訓練」とは何かということだと思う。

例えば、変動期のひとつであるフランス革命を見てみよう。1793年、ルイ16世が処刑される。これは王制の否定を意味するため、ヨーロッパ諸国は危機感を募らせ、第一次対仏大同盟を結ぶ。プロイセンやオーストリアは陸上から攻撃し、イギリスは海上封鎖でフランス海軍の拠点のトゥーロン港を包囲した。89年7月にパリの民衆がバスティーユ牢獄を襲撃したとき、国王の処刑にまで至ると分析した外交官や歴史家がいただろうか。ヴァレンヌ事件や、プロイセンとオーストリアによる革命への干渉への反感から民衆が急進共和派のジャコバン派を支持する。化学反応によって別の物質ができるように、変動期の歴史は事実と事実と相互に作用しあいながら進行する。

このように見てくると、変動期において必要なのは政治体制や経済力、思想的な潮流などを総合的に分析する力だと考える。ただ、その際に歴史の専門知識がまったく不要だと言うつもりはない。変動期においては、歴史の専門知識を生かして現実を動かす要素の強弱を予断なく判断する能力が大切だと思う。「アカデミックな訓練」がそういう意味であるなら、私の考えと主張は重なる。